

扇といへる扇子にて、加波貞右衛門へ命ぜられしといひ傳へたり。されば今古寺町小橋天神の神殿に傳來せし、中納言利常卿の持ち給へる扇子五本あり。其の体今世の扇子と製造方甚だ異なり。其の長一尺餘にして、骨は名古屋扇の製造方に似たり。五本の中にも一本は、その製造方殊さら異やうなり。いにしへの加賀骨の加波扇といふは、かゝる扇子にやといへり。さて加波貞右衛門、後には轉宅して河原町に居住し、加波扇を製造せしかど、今河原町をも退去し、何れに移りけん。

○堀樗庵居跡

樗庵は俳名麥水と稱し、初堅町池田長右衛門と一所に居し、池田屋某と稱し、後藩侯の醫師並と成り、堀樗庵と改稱し、後河原町に別家し、重ねて妙慶寺の邊に俳庵を結び、爰に居住すとぞ。麥水發句集に、

新宅にうつりけるとき

一枝は梅も頼むや下地窓

按ずるに、新宅に移徙せしとは、若しくは河原町の自宅より蛤坂の新宅へ移れる時の句なりけん。但し右舊邸は何れ

の家ならんか。今詳かならず。

○堀樗庵麥水傳

坂井一調の根無草に云ふ。樗庵は金城下堅町の産、池田屋長右衛門と聞わし商家藏宿の二男也。兄死して幼少の一子あるを守りそだて、其身獨身にして後見し、茶の湯道具持扱ひ、閑暇に書籍に眼をさらし、蕉門の俳諧を好寄りて、俳名を可遊と號し、百雀齋五々といふ人の門人なりしが、元文の末つかた勢州より、麥林家の跡を追ひ、麥浪といふ俳人金澤へ來りけるに、其の門人となり麥水と號す。墨跡或は諸道具類の目利に通達し、中頃後河原町に住居して、俳諧の点削をなし、京大坂・江戸などへ行通ひ、惣髮の姿と成り、堀樗庵と改稱して、居住所を泉寺町妙慶寺の邊りに移し、俳庵を結びて、孤栗の調を再興し、新点印を作り、二十五印・見点・蝶の印などを用ひ、門人餘多行通ひ、所口・氷見・城端・魚津・井波・高岡・小松・本吉・鶴來・宮腰など新連中多く、其名三州の貴賤に鳴る。爰に暮柳舎の門人に、水卷亭楚雀、俗名住吉屋次郎右衛門といひし人、老年に及びび狂人の如くなりしが、加越・能三州に昔より語り傳へし奇

怪の物語り共を集めて遊びけるを、麥水子只にや止みなんとて、文章を作りなし、則三州奇怪談と題號して述作す。又安永の頃かとよ、松任の驛より金澤西末寺の花揃ひを見物せんとて、富家の女子ども多く出けるに、野々市村のはさま往還の松原において、馬かたども四・五人打寄、希代の亂行を白晝になしたるを、文章の發端とし、越の白浪といふを述作す。又京都逗留の折、南蠻の商家の通辭を學び、長崎に至り趣き、良、半年ばかりも遊歴し、天草嶋を巡見して、其地の村長に馴れしたしみ、寛永の頃森宗意が行ひし幻術をば學び得て戻りしゆえ、衆人麥水こそ幻術を學びしと申せしかど、遂に行ひし事はなし。其頃加陽の名士に齋藤某と聞わし中條流の劍術居合の達人あり。幻術を深く熱心して所望せられしに、熱心に任せ相傳ありしとかや。さて天草嶋の地理に熟して、後南嶋變といふ書籍を述作し、寛永の頃天草嶋百姓一揆亂の始終を註釋せり。常に近隣の商家幼童を招き、經書の素讀算術など教へられし也。團恭・双六なども常人とは増さりしとかや。中にも將某は名を得し上手なり。泰雲公かねて聞召被爲及、安永の頃御將某の

御相手に被召出、晝夜怠りなく仕へ奉り、五人扶持賜り、御醫師並に仰付られたり。其頃南京將某といふ將某を作り、是もまた門人多し。また算術にも通達す。一とせ金澤に於て銀鈔遣ひありし頃、正銀割合の引替杯餘多なるに、麥水子將某の駒二・三枚を持って、忽ち割合を勘定なしけるに、衆人目を驚しけるとかや。殊に即興の文章、頓作・夜話・雜談に長じ、秋の夜の長きも麥水子來りあれば、貴賤高位も、共に眠る事なく、故に犬打童子童部も麥水々々と呼び、鼻のさき赤き横たはりなる人躰、惣髮の一畸人なりしゆえ知らぬものなし。麥水子の一子をば泰雲公召させられ、御能興行の度毎に子方など仰付られ、名を陸之丞と申しけり。十一・二歳ばかりの頃、我等がせがれ共と友達にて、諷仕舞など見聞せしに、御能大夫諸橋權之進早世し、跡を繼ぐべき一子もなく、幼少の娘ひとり也。泰雲公御意に依つて、陸之丞諸橋家の相續人に被仰付、彼家督と成にしゆえ、其頃麥水親子共に俳庵妙慶寺邊の自宅を退去し、諸橋家へ引移り、共に爰に居て、天明三年の十月初め麥水子空敷世を早うし、故人とは成けり。依つて天明七年の冬東香山